

ベルクソンをめぐって

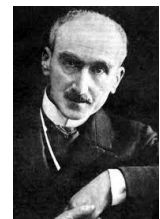
— 『道徳と宗教の二つの源泉』 第4章の読解 —

安孫子 信
(2022年3月5日 最終講義)

1

〈内容〉

1. オーギュスト・コント
2. ベルクソンとコント
3. 『道徳と宗教の二つの源泉』 第4章
4. 「開く」ということ
5. 「進化」ということ
6. 戦争—「二重狂乱」と「単純な生への回帰」



2

1-1 オーギュスト・コント (1798-1857)

- ・コントが受けたのは科学教育である。
- ・コントは終生、フランス革命後の社会の混乱（アナーキーの状態）に終止符を打ち、社会に秩序をもたらすこと、それを考えた。

3

1-1 オーギュスト・コント (1798-1857)

- a. 日本の哲学はコントから始まったといえる。「哲学」という言葉を作り、日本に始めて西洋哲学を体系的に導入した西周 (1829-97) は、「哲学」という名前で、コントの実証哲学を導入しようとした。
- b. コントは、フランス革命の余波が残る1798年に生まれた。数学に秀で、理科系エリート養成のためのエコール・ポリテクニクで学ぶ。ただ政治の激動期であり、学校を中退。一時サン・シモンの秘書を務める。その間1822年に「社会再組織に必要な科学的作業のプラン」を発表。新たな社会。科学によって知の体系化を果たすことと社会混乱に終止符を打つことを主張。その構想に従い、1830-42年に『実証哲学講義』全6巻を刊行。新たな科学である「社会学」を創出し、そのことで諸科学を統合する新たな哲学である「実証哲学」を確立。
- c. その後コントは、知の秩序づけは、感情の支えがなければ実現しないと考え、感情を社会が涵養していく仕組みとして、新たな宗教「人類教」を主張。それは1851-54年に刊行された『実証政治体系』全4巻で示される。
- c. 二つの主著はそれぞれ数千ページに及ぶもので、コントは今日（かつても）ほとんど読まれていない。しかし「コントに対する忘恩はわたしたちの時代の一般的な事実であるが、それは主としてかれの学説が人の決して無視しえないような学説に属するというところから生ずるものである」（アラン『イデー』）。
- d. アランが言うように（西周が見たように）、コントは哲学を近代から現代に大きく転換させた思想家とすることができる。

4

1 - 2 形而上学がもたらす知のアナーキーと実証哲学

・ コントは社会のアナーキーは、知のアナーキーから来ており、それはさらに、いまだに支配的な形而上学的哲学の二つの金看板、「真理」と「理性」から来ていると考えた。

・ コントはその金看板を下ろさせるために科学に向った。彼は「科学の成功」の事実はこの二つを終了させると考えた。

5

1 - 2 形而上学がもたらす知のアナーキーと実証哲学

a. フランス革命後の社会のアナーキーな状態。コントはその原因を社会における知の秩序の不在に見た。コントによれば、それはさらにそれまで支配的であった哲学、つまり形而上学的哲学から来ていた。形而上学を特徴づける態度は、デカルトがそうであったように、①〈絶対的真理〉を②〈純粋な理性〉によって求めようとするものである。

①〈絶対的真理〉：現象は複雑で、それについて〈絶対的真理〉を言うためには、現象のどこか一面をたまたま選んできて「恣意的」に主張するほかはない。〈絶対的真理〉はたんに「恣意的」である。（タレスの水、アナクシメネスの空気、ヘラクレイトスの火の例）

②〈純粋な理性〉：〈絶対的な真理〉を導く〈純粋な理性〉を標榜する哲学者は、大部分が、健康な成人男性である。そこでは、病者、老人・子供、女性の場合は排除されている。〈純粋な理性〉は普遍的ではなく、たんに「個人的」である。

b. こうして、形而上学においては、たんに「個人的」な〈理性〉が「普遍的」と、また、「恣意的」に選ばれた〈真理〉が、「絶対的」と主張されるのである。そのとき、〈普遍的な理性〉の間、また〈絶対的な真理〉間で対立は避けられない。

c. このような形而上学に代わる哲学をコントは広く歴史的・社会的事実となっている「諸科学の成功」から得ようとした。科学的知識は、①徐々に、相対的に（〈進歩〉）、②多くの問題が多くの人の手によって（多様性を背景にした〈秩序〉）、形成されてきている。実証哲学について、コントは、「ここ三世紀に固有なあらゆる偉大な科学的業績が自然に働き合うことによって、この哲学は準備されてきた」と主張している（『実証精神論』）。つまり、実証哲学は科学を基礎付ける（デカルトの意味で）、あるいは批判する（カントの意味で）しようとする哲学ではない。それはむしろ「科学の成功」を踏まえて、そこから生まれ、それを活かそうとする。

6

1 - 3 実証哲学の二つの法則

・ コントは科学の成功から二つのことを学ぶ。

①人間の知識は進歩するということ（〈進歩〉）。

→「神学的」⇒「形而上学的」⇒「実証的」の「三状態の法則」

②人間の知識は一定の秩序の下で多様であるということ（〈秩序〉）。

→「数学」・「天文学」・「物理学」・「化学」・「生物学」・「社会学」の「分類の法則」

・ コントはこの二つの法則（〈進歩〉と〈秩序〉）は形而上学哲学の「絶対的真理」と「純粹で普遍的な理性」を退場させるものと考えた。

7

1 - 3 実証哲学の2つの法則

①「三状態の法則」

a.これは「人間の知識は現象を、(1)「神学的」、(2)「形而上学的」、(3)「実証的」という3つの状態を順に経て発展する」と主張する。その際、「それぞれは、(1)神々、(2)抽象概念、(3)科学法則に準拠する」とされる。（具体例、病気を、(1)「疫病神のせいにする」、(2)「質（たち）のせいにする」、(3)「インシュリンが足りないことを原因とする」）

b.この法則は、一方で、三段階のそれぞれは哲学的に独立しており、互いを絶対的には否定しえないとして独断論を退ける。（「アポロンやミネルバの非存在を理論的に証明したものはなかった。しかし人々はいつの間にかそれらを信じなくなった」（『実証精神論』））。しかし、他方で、三段階のそれぞれは自身の「時宜」を有し、でたらめに現れないとして、懐疑論も退ける。（5歳の子供にはサンタクロースが存在しているだろうが、20歳の大人が「サンタ、サンタ」と叫んでいればおかしい。）

c.この法則によって、①〈絶対的真理〉は廃される。この法則に従えば、命題に真・偽を言うことはできず、命題にはただ神学的・形而上学的・実証的を言えるのみとなる。

②「分類の法則」

d.これは「人間の知識が扱う現象分野は、単純なものから複雑なものへ、(1)「数学」・(2)「天文学」・(3)「物理学」・(4)「化学」・(5)「生物学」・(6)「社会学」の6科学が扱う分野に分かれる」と主張する。

e.6科学は時間的にも順に成立して来る。そのとき、後行の科学は先行の科学に依存するが、決して還元されないとして、還元主義を退ける。しかし、他方で、6科学は「方法の統一と理論の同質性」を有したたの寄せ集めではないとして、百科全書主義も退ける。

f.この法則によって、数学還元主義（普遍数学）も、物理主義も、生命主義も、歴史主義も退けられる。すなわち、②〈普遍的理性〉は廃される。「まともに自然を探求すれば、それはわれわれの知性が欲するほどには結びついたものになっていないことがわかる」（『実証精神論』）。

8

1-4 コントの3つの仕事

①実証哲学

こうして、実証哲学が確立され、それによって形而上学的哲学は退場し、社会のアナーキー状態に一定の終止符が打たれた。(19世紀に入り、もはや大文字の〈真理〉も〈理性〉も語られなくなる)。

②社会学 (=人間諸科学)

それまで哲学(形而上学)に委ねられていた人間の諸研究についての実証科学が次々に生まれていった。(たとえば、社会学、言語学、人類学、宗教学…)

③人類教

科学史の知識を社会(子供たち)に広めるシステムとして、今日の公教育への道が開かれた。

9

1-4 コントの3つの仕事

①「実証哲学」の確立—形而上学の退場

a. 社会学によって実証的な知が現象の全体に及ぶことになる。哲学が「人間の有する諸概念の一般体系」であるとして、社会学は一つの哲学(実証哲学)を実現させる。そのとき、すでに見たように、〈真理〉や〈理性〉とともに、形而上学は退場させられている。人間の精神・道徳的現象は、個(理性)ではなく社会(諸科学)において探求される。「個が抽象的なものであり、社会がそうなのではない」(『実証精神論』)。

b. 哲学史にも新たな理解。たとえば、プラトンは「あの形而上学者」としか言及されない。デカルトで語られるのはコギトではなく「解析幾何学」。カントについては「人間の知における歴史の重要性に晩年気づいたが遅すぎた」とし、ヘーゲルについては「歴史の重要性に気づいていたが、〈絶対〉に取り付かれていた」とする。コント以降に大文字の〈真理〉と〈理性〉は退場し、19世紀代わりに指導原理になるのは、〈進歩〉(「三状態の法則」と〈秩序〉(「分類の法則」))。

②「社会学」の創設—人間科学の誕生

c. 「社会学」の内、人間性の、時間で変化しない構造の面を扱うのが「社会静学」(現代の構造主義の先駆)。具体的には、宗教、所有、家族、言語、組織といった諸現象を扱う。それら諸現象は伝統的に哲学が内観によって扱ってきたが、「社会静学」は、それら子供や老人、女性、病者、狂人、異民族などにまで広げた観察によって扱う。プラトン以来、哲学が「そもそも正義とは何か」(本質)を問い続けてきたとして、コントは「正義」という言葉がどう使われているか、きたか(使用)それを問えとする。こうして、社会学、言語学を始めとする今日の人間諸科学(宗教学、文化人類学、社会心理学…)への道が開かれた。

d. 他方、コント社会学の本体をなすのは「社会動学」であり、その実質的内容は科学史。すでに見た、「三状態の法則」と「分類の法則」の二法則がもたらされる。「科学的方法の歴史はコントによってほとんど哲学自身と見なされた」(ニーチェ『権力への意志』467)。

③「人類教」の提唱—公教育の誕生

f. 「実証哲学」の確立の後に、「精神に対する感情の優位」の事実に基づき、コントは感情を喚起し維持するための宗教(「実証的宗教」)の設立に赴く。その際に、神(神学的宗教)や自然(形而上学的宗教)の代わりに、その宗教が向ったのが人間。それは「人類教」と名付けられる。その場合の人間は、空間にではなく、時間に広がる人類。「人類は生者よりも、むしろ死者によって成り立つ」。カトリック教会の聖人歴にならう「実証主義歴」が編まれ、そこにはアリストテレス、アルキメデスからデカルト、ビジャに至る偉人が崇敬の対象として並ぶ。この「人類教」を内容において見れば、それは現在、世界すべてが採用している公教育に当たっている。われわれは「織田信長は本能寺で討たれた」を先生が言っている、教科書に書いてある、ただそのことだけから信じるのである。この「信」のことを、コントは「人類教」と名づけた。

10

2. 1 アンリ・ベルクソン (1859-1941)

- ・アナーキーな社会の解消はこうして実証哲学によって遂行されたとして、そして形成される〈秩序〉が、それぞれの社会を「閉じた社会」に化して、「閉じた社会」と「閉じた社会」とが全面的に争うこと、つまり戦争を生むこと、ベルクソンが真に直面したのはその問題である。革命の問題（コント）から、戦争（ベルクソン）の問題へ。
- ・『二源泉』（1932）ではそれは明らか。しかし、最初の『試論』（1888）からすでにベルクソンの問題は「閉じた社会」であったと言える。
- ・ベルクソンはその問題の原因と、その問題を乗り越える可能性とを、コントと攻守を替え、実証哲学の〈進歩〉と〈秩序〉に見ていこうとした。
- ・以下では、その様子をベルクソンの『道徳と宗教の二つの源泉』（1932）の第4章で見えていく。

11

2. 1 アンリ・ベルクソン (1859-1941)

a. 遠回りをしたが、ここからベルクソン。最初の三つの主著、『意識に直接与えられたものについての試論』（『試論』（1888）と『物質と記憶』（1896）、『創造的進化』（1907）ではなく、四つ目、最後の主著『道徳と宗教の二つの源泉』（『二源泉』（1932）の、さらに第1章「道徳的責務」、第2章「静的宗教」、第3章「動的宗教」ではなく、最後第4章「最後の指摘—機械主義と神秘主義」を、主に扱っていく。

※以下で引用はベルクソン『道徳と宗教の二つの源泉』（合田正人・小野浩太郎訳、ちくま学芸文庫）からとし、数字は同書のページ数（ただし一部引用で従っていない場合もある）。

b. 19世紀初め、コントはフランス革命後のフランス社会の混乱に直面していた。20世紀、『二源泉』（1932）におけるベルクソンは、二つの世界大戦間の世界に直面している。この年にドイツではナチスが第一党となり、翌年にはヒトラーが首相に就任している。

c. もちろん人類は戦争をし続けてきている。それを認め、しかし、これまでの「征服のための征服」といった「偶発的な戦争」と区別して、ベルクソンは「今日の戦争」を「本質的な戦争」と呼ぶ（395）。自己保存を旨とする「閉じた社会」の本質にかかわる戦争である。

d. ベルクソンはその問題の原因と、その問題を乗り越える可能性とを、コントの実証哲学と問題とをすり合わせることによって見ていく、と言いきえる。攻守を替えることになるが、アナーキーを乗り越えさせた実証哲学の〈進歩〉と〈秩序〉とを、ベルクソンは戦争との関係で見えていこうとする、と言いきえる。そのような観点で、以下、ベルクソンを扱っていきたい。

12

2. 2 ベルクソンと実証哲学

- ベルクソンはスピリチュアリストだとして、彼と実証哲学と刷り合わせを言うことは場違いではないか、ということについて。
- ベルクソンは実証的形而上学を自ら標榜している。

13

2. 2 ベルクソンと実証哲学

a.19世紀を通じて実証哲学と対決したのはスピリチュアリズム。ベルクソンは普通はスピリチュアリズムの流れに置かれる。

b.しかしそれは一面的。ジャン・ガイヨンの言葉。「ベルクソン哲学は、19世紀の半ば以降「科学の哲学」と呼ばれてきた哲学の枠外にあって、なお実証科学と本質的な関係を維持した20世紀哲学のうちの一つである」。つまり、ベルクソン哲学は「科学の哲学」ではない、しかし、「科学と本質的な関係を維持した哲学」。

c.ベルクソン自身の言葉。「私が来るべき哲学[形而上学]に見るのは、その流儀が経験的であり、前進的であり、他の実証科学と同様に、実在の注意深い研究の結果得られた最新成果を、暫定的にのみ決定的なものとして示すよう強いられているような科学である」として、自らの哲学を「実証的形而上学」と呼んでいる（『心理・物理の平行説と実証的哲学[形而上学]』）

d.さらに次のように述べている。「どのような哲学も、実証主義でさえ、実証科学をこれほど高くは置かなかった」（『緒論』）。

14

2. 3 ベルクソンとコント

- ・ベルクソンとコントとの近い関係を言うことも場違いではないか、ということについて。
- ・ベルクソンによるコントへの、とくに「分類の法則」への言及。

15

2. 3 ベルクソンとコント

- a.ベルクソンはコントに、とくに「分類の法則」に言及している。
- b.ベルクソンが行っている言及。「近代哲学の偉大な業績の一つ」としてコントの『実証哲学講義』に触れつつ、ベルクソンは「数学から社会学まで諸科学の間にヒエラルキーの秩序を打ち立てるといふ、単純ではあるが天才的なその考えは、コントがそれを決定的真理として打ち立てて以来、われわれの精神が認めざるをえないものとなっている」（『フランス哲学』）。つまり、コントの「分類の法則」を「天才的」と評価している。
- c.また、同じテキスト（『フランス哲学』）で、「分類の法則」でとくに注目しているのは、諸科学の協調の考え方よりはむしろ、「諸科学相互の還元不可能性」の考えであることを示唆している。
- d.さらに、『ラヴェッソンの生涯と業績』で、コントの「分類の法則」を自分に引きつける解釈を行っている。「最後、最終巻では、生命の諸現象全体が明確に物理・化学的事実から分離される。生命の現象を考察すればするほど、コントは事実の様々な種類の間、もはや単に複雑さの違いだけではなく、位階や価値の違いをも設定する傾向を強めていった。ところで、この方向に進んでいけば、人が到達するのはスピリチュアリズムなのである」。

16

3. 1 『二源泉』第4章「最後の指摘—機械主義と神秘主義」の冒頭と末尾

- 今回扱うベルクソン『二源泉』第4章の冒頭と末尾の文章の引用。
- 冒頭と末尾だけから第4章の全体を推し量るのは乱暴だが、コントの〈進歩〉と〈秩序〉は、「アナーキーな社会」（革命）の問題を解決するがそのことで、別の「閉じた社会」（戦争）の問題を引き起こしたことの示唆を読み取れる。
- そしてベルクソンがその新たな問題に対して用意するのが、〈秩序〉に代わる〈開き〉であり、〈進歩〉に代わる〈進化〉であることの示唆を読み取れる。

17

3. 1 『二源泉』第4章「最後の指摘—機械主義と神秘主義」の冒頭と末尾

a.第4章の冒頭：「われわれが行った分析の成果の一つは、社会に関する領域において、閉じたものから開かれたものを徹底して区別したことであった。閉じた社会とは成員が相互に支え合う社会であり、彼らは自分たち以外の人間たちに無関心で、つねに攻撃か防御の態勢を取っており、要するに戦闘的な態度を取ることを強いられている。…」（367）。

b.第4章の末尾：「人類は自分がなしとげた進歩の重さで半ば押し潰されてうめき苦しんでいる。人類は自分の将来が自分次第であることが十分にわかっていない。第一に、人類はこれからも生き続ける意志があるのか否かを考えてみなければならない。第二に、ただ生きることを望むのか、それとも、ただ生きることに加えて、神々をつくり出す機械たる宇宙の本質的な機能が、反抗的なこの地球でも果たされるのに必要な努力を払うことを欲するのかどうかを考えてみなければならない」（436）。

※数字は『道徳と宗教の二つの源泉』（合田・小野訳、ちくま学芸文庫）のページ数。

18

3. 2 第4章の冒頭－〈秩序〉の問題

- ベルクソンは、〈秩序〉にしばられた「閉じた社会」とは明確に区別されるものとして「開いた社会」を考えている。
- 「閉じた社会」では〈秩序〉によって、自己保存の体制を整えているが、そのことで、同じく体制を整えた外の別の「閉じた社会」とは戦闘の態勢に入ることになる。

19

3. 3 第4章の末尾－〈進歩〉の問題

- ベルクソンは〈進歩〉を言うが、それは「閉じた社会」におけるいわゆる〈進歩〉であって、その「重さ」でわれわれを「半ば押し潰す」ものである。
- ベルクソンは「閉じた社会」に留まらせる〈進歩〉ではなく、「閉じた社会」から「開いた社会」へと進む〈進化〉（「創造的進化」）を示唆している。

20

4. 1 ベルクソンにとっての「分類の法則」

・ベルクソンはコントの「分類の法則」を認めるが、それを拡大しようとする。すなわち〈閉じた〉「分類の法則」から〈開いた〉「分類の法則」へ向う。

21

4. 1 ベルクソンにとっての「分類の法則」

a. ベルクソンの主張。

「かつて純粋数学から出発した実証科学は、力学を通り、物理学そして化学を通り、遅れて生物学に到達した。初期の領域は実証科学の得意領域であり続けたが、それは不活性の物質の領域である。[ところが]有機物の世界では実証科学はそれほど安んじてはおられない。その世界で実証科学が確かな足取りで進みうるとすれば、それは物理学や化学に頼る場合だけである。実証科学は、生物にあって固有に生命的なものではなく、むしろ生命現象にあって物理・化学的なものに結びつくのである。しかし、[さらに]精神に到達して、実証科学の困惑は大きい。実証科学は精神について何らの知識も得られないというわけではない。そうではないが、精神と物質との境界線を離れるにつれて、それだけ得られる知識があいまいになるのである。この新たな地帯では、古い地帯においてのように、ただ論理の力に頼っているだけでは前進できない。ここでは常に《幾何学の精神》から離れて《繊細の精神》に訴えていかなければならないのである」。

(『心理・物理の平行説と実証的哲学[形而上学]』)

b. 普遍数学を説くデカルトではなく、幾何学の精神と繊細の精神を分けるパスカルが引かれる。「分類の法則」は大きくは維持される。しかし、六個の科学で閉じた体系を作りそれによしとするコントの分類(〈秩序〉)は維持されない。一つのカテゴリは、つねにその外に新しい項を求める。

22

4. 2 科学の〈閉じた〉分類と「閉じた社会」

- ・科学の〈閉じた〉「分類の法則」は、それを扱う人間も自己保存に終始させ、社会も〈閉じた〉ものにする。つまり「閉じた社会」を生じさせ、戦争を近づける。
- ・〈秩序〉は戦争を近づける。

23

4. 2 科学の〈閉じた〉分類と「閉じた社会」

- a. 第4章では精神科学を物質科学へ還元しようとする知性が批判的に語られる。「人間的知性が魂に目を向けるや否や、人間的知性は内的生の空間的表象を与える。…そこから、意識の諸状態の相互浸透を考慮しない原子論的な心理学の数々の誤謬が生じる。…魂と身体（脳）の関係はどうか。…実際、心的活動の物質的随伴物が心的活動そのものの等価物であるということが前提的理解となった」（430-432）。
- b. 「内的生」、これは本来、メロディがそうであるように、切れ目を持たない。しかし、それが楽譜に写され「空間的表象」に化すとき、バラバラな途切れ途切れのものになる。「心的活動」、これはオーケストラが奏でる音楽そのもの。音楽をそこでの「物質的随伴物」、たとえば、指揮者のタクトの動きと「等価物」にすることはできない。
- c. 「この（知性の）主張は単なる形而上学的仮説であり、諸事実についての恣意的解釈である」（432）と指摘される。物質科学の外に出ず、物質ですべてを説明しようとする、それは「玩具で楽しむこと」、「蜃気楼の周りでもがくこと」に喩えられている（430）。「見えるものと触れるものしか存在者として受け入れないこと」（435）、それは「快楽に執着し、快楽に目を向けること」（436）と同じとされる。（ex.レゴで何でも作れる。何でもは「蜃気楼」だが、ここには快楽がある）。ここでは人間は、物質の自己保存（慣性）に自らを預けているが、これは自らを自らの自己保存にますます縛りつけることである。こうした自己保存への固着は、他への無関心、さらには他に潜在的に戦闘の態度を取ることを含む。このとき、「閉じた社会」は他に対して、ますます強固に閉じることになる。
- d. 〈閉じた〉分類を踏襲することは「閉じた社会」を生み、そこでの自己保存への固執は、戦争を生む。（ex.東京六大学（分類）⇒「東京六大学」（閉じた社会）⇒「東京六大学」×「関西六大学」（戦争））。

24

4. 3 科学の〈開いた〉分類と「開いた社会」

- ・科学の〈開いた〉「分類の法則」はそれを扱う人間を自己保存から解き放ち、社会も〈開いた〉ものにする。戦争を遠ざけ、「開いた社会」を近づける。
- ・〈開く〉こと（〈無秩序〉とは言わない）は戦争を遠ざける。

25

4. 3 科学の〈開いた〉分類と「開いた社会」

a.ここでベルクソンは自分のかつて仕事である『試論』や『物質と記憶』に言及して、科学の非還元主義を語る。ひとことで言えば、物質科学とは別に、その外に、精神科学を考えるとすることになる。心が空間から解放され、物質を越えることが語られる。「心において意識の諸状態は相互浸透し持続している。…精神活動はなるほど物質的な随伴者（脳）を持つが、この随伴者は精神活動の一部分しか描いていない。残りの精神活動は無意識の状態にある。…要するに、われわれの脳は表象の創造者でもその保存者でもないのだ。脳は単に、表象が効力を持って働くようにそれを制限するだけである」（433）。（ex.意識の状態についてのメロディの喩え（切れ目はない）。心と脳の関係についてのコートとコート掛けの喩え（コート掛けにコートは依存、しかしコート掛けをいくら調べてもコートはわからない））。

b.この〈開いた〉分類と「開いた社会」との関係が、「心霊科学」を引いて語られる。「心霊科学」は「心霊経験」を扱い、「来世信仰」も含む「広大な未知の大地」（435）を扱っており、われわれに「歓喜」（自己保存を超えている）をもたらしえるが、その「歓喜」は、「快樂」（自己保存に留まる）を覆い隠してしまう、と言われる（436）。いささか唐突な議論であるが、「来世信仰」を「いつまでも」ということが信じられていることとするとき（ex.このコンサートをいつまでも聞いていたい）、自己保存と言った問題は消失し（ex.空腹も忘れる）、他への戦闘態度もそこでは生じてこない（ex.見も知らずの隣の人と思わず握手したくなる）。「開いた社会」の前で、「閉じた社会」はフェイドアウトしてしまう。

c.物質に留まらない〈開いた〉分類は、自己保存からわれわれを脱却させ、「開いた社会」へ導き、戦争を遠ざける。

26

5. 1 ベルクソンにとっての「三状態の法則」

- ・「閉じた社会」においては、人間は一貫して自己保存に固執する状態にあって、変化はない。そこに、互いに区別されるような三つの状態は認められない。
- ・加えて、人間は、いわゆる原始人であれ文明人であれ、知性的であって、その知性の有限性から、必ず、「閉じた道徳」をつくり、「静的宗教」を作ると言われる。「神学的」、「形而上学的」、「実証的」は同時に起こっている。
- ・ベルクソンはコントの〈三状態の法則〉を認めない。

27

5. 1 ベルクソンにとっての「三状態の法則」

a. ベルクソンは〈進歩〉を認めず、「三状態の法則」への言及もない。

b. ベルクソンは時間の哲学者である。「持続」や「進化」は大いに語られるが、〈進歩〉はそうではない。ベルクソンはむしろ反進歩主義者と言いうる。「自然の素地は、そうした獲得物によって大部分覆われていよう。しかし素地は決してなくなったわけではない。幾世紀を通してほとんど変わることなく残っている。…それは、実は、最も文明の進んだ社会でも、ちっとも損なわれずに、びんびんして生き続けている。…われわれの文明社会と、じかに自然の手で決められた社会とは、よしどれほど違っていようとも、前者が後者との根本的類似を示していることは事実なのである」(38)。生物進化が言われるとしても、歴史的進歩は語られない。加えて、「「原始人」たちの知性は本質的にはわれわれの知性と異なる。彼らの知性はわれわれの知性と同じように、動を静へと変換し、作用を事物へと凝固させる傾向を持つ」(175)と言われ、さらに、「人間はいつの時代にも機械を発明してきたし、古代にも驚くべき機械があった…」(419)。知性においても技術においても原始人と文明人に差はない。

c. 加えて、『二源泉』が全体で示していることは、道徳（「閉じた道徳」）も宗教（「静的宗教」）も、ともに知性の付帯物で、知性が不完全であるために本能がそこで知性を補いに現れ出てきて、生まれている。「絶対的に定言的な命法は（本来）本能的もしくは夢遊病的な性質のもの」(32)であり、「どんな道徳も生物学的本質を持っている」(138)。また、「唯一理性を備えたものたるホモサピエンスは、非合理的な諸事象にみずからの生存を依存させる唯一の存在」(140)であって、「宗教は粗野であればあるほど、よりいっそう一民族の生活のなかで実質的に場所占める」(139)と言われている。すなわち、人間の「閉じた社会」があるとき、人間はまず十分知性的であるが、そのとき、不可避的に同時に、「閉じた道徳」も「静的宗教」もそこに必ずある。コントの「三状態の法則」は誤りである。「神学的」と「形而上学的」と「実証的」は同時である。

28

5. 2 〈進歩〉と「閉じた社会」

- ・自己保存への固執の事実そのものになんの変化がないとしても、それでもその度合いが増すということについて、それが通常〈進歩〉と言われることとなる。それは種族の「絶滅の危機」の切迫度の違いから生じるとされる。
- ・〈進歩〉は人間を戦争に近づける。

29

5. 2 〈進歩〉と「閉じた社会」

- a.根において原始人と文明人に違いはない。それでも原始人と文明人が分かれたるとして、両者を分かつものは何なのか。「文明化せざる者たちに欠けていたのは、優越した人間では恐らくなく、むしろ、このような人間に優越性を示す機会、かれに続こうという他人の意向である。しかし、社会がその道に入るためには、敵の部族に新型の武器が現れて生じるような、絶滅の脅威がおそらくなければならない」(236)。つまり、原始人と文明人の差を言うとして、その場合の〈進歩〉の背後にあるのはただ「絶滅の危機」の有無ということである。
- b.「科学が進歩する調子を考えれば、交戦国の一方、取っておきの秘密を所有するほうが、他方を壊滅させる手段を手に入れる日が近づいている」(395)。1932年にベルクソンは、1945年の広島、長崎をすでに見ている。
- c.つまり〈進歩〉とは、それがあるとすれば、それは「閉じた社会」の〈閉じ〉の度合いが増すこと以外の何ものでもない。度合いが最大に増せば、他を絶滅させることになる。〈進歩〉は絶滅を背景にした「閉じた社会」同士の競争での勝ち負けの差をあらわしている。それだけ。こうして、〈進歩〉はわれわれを「半ば押し潰す」(436)のである。

30

5. 3 〈進化〉（「創造的進化」）と「開いた社会」

- 他方で、〈進化〉を「創造的進化」とすれば、ベルクソンは生物進化のみならず、科学や技術にも進化を認めることになる。予測を越え、既存の概念では説明できない、科学や技術のどのような発見や発明も進化である。
- 〈進化〉においては、予測されないという事態も決して恐れさせない。予測されないということが、むしろ〈進化〉の条件になる。そこでは自己が変ることこそが求められ、自己保存は二の次となる。

31

5. 3 〈進化〉（「創造的進化」）と「開いた社会」

a.ベルクソンは「三状態の法則」を認めなかったとしても、科学にも〈進化〉を認めている。しかも、生命の科学だけでなく、物理学にも認めている。物理学も本来、直観に従って、「動性」を扱うものとベルクソンは主張している。「近世の科学が発足したのは、人が動きを独立な現実として樹立した日からである。ガリレオが傾けた平面に球を転がして、この上から下へいく運動をそれ自身のためにそれ自身として研究し、その原理を上および下という概念、アリストテレスがそれによって十分動きを説明できると信じていた二つの不動のうちの求めるのをやめた日から発足している」（『形而上学入門』）。科学も本来は〈開いて〉いて直観によって〈進化〉する。記号によって物質の支配を行うのは知性である。

b.こうした〈進化〉においては、予見されないこと、繰り返しではないということ、「発見」であることが積極的に評価される。自己保存的態度は場を持たない。ここでは〈進化〉は、人を「都市国家の障壁を越えさせ」る。それには従う人がいて、〈進化〉は「開いた社会」を準備する。

32

6. 1 戦争

・「閉じた社会」を論じる際には、そこで直ちに、人類に戦争が不可避であることが言われていた（「戦争は自然的である」（392））。ただ、「開いた社会」を論じて、示唆はされるが、戦争がどう回避されるかは明言されていない。最後にその点を第4章で確認してみたい。

33

6. 1 戦争

- a. 『二源泉』第1章・第2章での「閉じた社会」と「静的宗教」の議論で、すでに戦争が人類に不可避であることは示されていた。「戦争は自然的である」（392）。
- b. そして、『二源泉』第1章・第3章での「開いた社会」と「動的宗教」の議論で、「閉じた社会」（〈秩序〉と〈進歩〉）が、「開いた社会」（〈開き〉と〈進化〉）に転じうることも示された。
- c. ただ戦争について、それがどう回避されるかについての議論は、『二源泉』第4章を待つことになる。ただ、第4章でのその議論はいささか意外な言明から始まる。「開かれた社会は、人類精鋭の数々の魂に断続的に夢想され、創造される度に自分の持つ何ものかを実現する。…しかし、一時的に開かれた円環も、各々の創造がなされた後につねに閉じてしまう」（368）。つまり、〈開いた〉ものは必ず〈閉じる〉。ここから第4章では「二重狂乱」という考えが示されてくる。

34

6. 2 「二重狂乱の法則」

- ・ベルクソンはここで、「開いたもの」は「閉じたもの」に転じ、しかしその「閉じたもの」は「開いたもの」にさらに転じるという、振り子運動を主張する。それが「二重狂乱の法則」。ただし、それは単なる繰り返しではなく、「記憶」を引きずるので、徐々に上昇するらせん状の運動となる。
- ・加えて、ここでの力点は「どんなに開いても閉じる」ということにあるのではなく、「どんな閉じも開きに先立たれている」ということであって、それは必ず「起源の開き」の「記憶」を含んでいるとされるのである。

35

6. 2 「二重狂乱の法則」

- a. 〈閉じたもの〉から〈開いたもの〉への進化（「創造的進化」）に、今、「〈開いたもの〉は必ず〈閉じる〉」という事実が付け加えられる。〈開き〉を「推進力」、〈閉じ〉を「停止力」として、この「前進」と「停止」の二傾向について、「傾向が二つであるなら、人が特に執着するのはまず二つのうちの一方の傾向ある。この傾向とともに、人は…総じて可能な限り遠くへと進む。次いで、この進展の途中で獲得したものを携えて、後方に置いてきたもう一方の傾向を探しに戻る。今度は最初の傾向を無視してこの傾向を発展させるのだが、この新たな努力は、…最初の傾向を再開し、それをもっと遠くまで推し進めるまで継続される」（406）。二つの傾向のうち一方への傾き（「狂乱」）が、やがて反動で揺れ戻って、もう一方への傾向への傾き（「狂乱」）を生む、それが繰り返されると説かれる。
- b. これは一種の振り子運動だが、それぞれの揺れは「記憶」され、そこにはその分の前進が生じていく。それはむしろ、らせん状の上昇運動となる。その限りでこの「二重狂乱」は、「創造的進化」と対立せず、むしろ、そこでのそもそもの物質と生命の対立を弱めて、物質に対する生命の支配をより見えやすいものになっている。物質は生命が突破すべき障害ではない。生命は有限で、限りなく「前進」しえず、「停止」して物質に化さざるを得なかった。しかし、その物質は本来「前進」である生命がただ「停止」しているだけであって、いつとは言えないが、いつか「前進」するのである。
- c. この「二重狂乱」は、物質と生命の間だけでなく（『創造的進化』）、空間と持続の間にも（『試論』）、身体（脳）と精神（記憶）の間にも（『物質と記憶』）言われえ、それは「閉じた社会」と「開いた社会」の間にも言ええるのである（『二源泉』）。（cf.406）

36

6. 3 機械主義と神秘主義

・ベルクソンに従えば、大規模な産業の時代、人類の「二重狂乱」を構成する二つの要素は、「機械主義」と「神秘主義」である。前者は「欲求」の拡大、「複雑さ」に向う。後者は「欲求」の抑制、「単純さ」に向う。

・一方で、「欲求」は「閉じた社会」の自己保存に従属している。「欲求」はその社会での他者への虚栄心（‘自分も欲しい’）に従ってしか生じない。「複雑さ」の果てで、それは風船に穴が開くように、いつか必ず消失する（ex.大航海時代の胡椒やシナモンへの熱狂）。「欲求」に‘いつまでも’ということはない。

・他方で、「単純さ」を支える意志は、「起源」の記憶につながっていて、本来、‘いつまでも’。

・この両者には、中世に遡る形で「二重狂乱の法則」が確認される。中世は「神秘主義」に振れた時代。その後15-16世紀から今日までは「機械主義」に振れた時代。いまや、再び「神秘主義」への振れを考えうる。

37

6. 3 機械主義と神秘主義

a. 「閉じた社会」が生む戦争は自己保存のため、つまり、「ある生活水準の維持のため」であり、社会の「全員が全員に対して戦う」ことになる（395）。現代において「生活水準」を決定しているのは産業である。「先の戦争（第一次世界大戦）はというと、…将来に漠然と予見される戦争と共に、われわれの文明の産業的性格に結ばれている」（398）。すなわち、「長い間、産業主義と機械化は人類を幸福にすると理解されてきた。…人類がこれほどまでに快楽、贅沢、富を渴望したことはかつて一度もなかった…。（今も）抗しがたい力が人類をその最も卑俗な欲望の満足へと…荒々しく向わせている…」（402）。この産業主義、機械主義が「狂乱」の一方方向をなす。それを支えるのは「欲求」であり、その力は「虚栄心」から来ている（‘自分も欲しい’）。「虚栄心」が去れば、「欲求」も一挙に消失する。それが‘いつまでも’となることはない。

b. もう一つの「狂乱」が、生命の推進力に従う神秘主義である。それは禁欲的で、「欲求の満足」という自己保存の方向とは真逆に、苦を忍び自己が変わることをいとわない。機械が人間の身体の拡張だとして、内にある生命の推進力を魂とすれば、「この途方もなく肥大した身体のなかで、魂はというと、…今、その身体を満たすためにはあまりに小さ（い。）このような事態から、身体と魂のあいだに空隙が生まれ、社会、政治、国際関係に係る恐ろしい諸問題が生じる」（426）。その「空隙」を埋める必要がある。

c. ここでベルクソンがあげるのが「二重狂乱」である。神秘主義は「飢えの恐怖に捉えられた人類の間には伝播されない。…（まず）神秘主義が機械主義を呼び出す」（425）必要があった。しかし、「（こうして）神秘主義は機械主義を呼び求めると言うだけで済ますわけにいかない。拡大された身体は魂による補完を待望し、機械主義は何らかの神秘主義を要請」することになる（426）。

38

6. 4 単純な生への回帰

- ・菜食主義の例などから、「単純な生への回帰」は、風船（「欲求」）に穴を開けるように、それ自身、単純なことと示唆される。
- ・しかし、その単純さには「惨苦の努力」が避けられないとも言われる（62）。「惨苦の努力」は貫徹される（「それが何だろう」（53））。そしてその努力は「閉じた社会」の障壁を乗り越えさせる（77）。それを支えているのは「欲求」ではなく「意志」（愛）である。
- ・このようにして、果たして、人類に戦争の回避は可能なのであろうか。この「意志」（愛）がある種の引力（魅力）となって、他の人々にも障壁を乗り越えさせることはできるのだろうか。

39

6. 4 単純な生への回帰

- a. 「二重狂乱」は「記憶」を介してのものである。ただしそれは知識のことではない。「起源」が想起、共感されるのである。「本能と習慣以外に、意志に直接働きかけるものとしては、感受性の作用しかない」（52）。
- b. 「単純な生への回帰」のベルクソンの例。かつては肉料理を好んでいたが今は菜食主義の友人の例。さらに、「近い将来自動車は今のようにはや欲しがられなくなることもありうる」（418）とも言われる。しかし、この「回帰」、肉食から菜食へ、自動車から自転車へということ、これが確かに、「機械主義によってこれまで以上に大地へと屈曲させられた人類が、機械主義を通して身を起こし、天を眺める」に当てはまっているとしても、他方で、「科学の進歩によって、交戦国の一方が他方を壊滅させる手段を手にする日が近づいている」（395）とも言われていた事態の切迫の中で、その「回帰」はあまりに悠長なことではないのか、の疑問。
- d. 他方で、「単純な生への回帰」は、「風船から一気に空気が抜ける」（418）ような、それ自身、単純なことと示されていたが、実は、「起源の推進力」が現実に具体的に現れ出るためには、大変な努力が必要とも言われていたのである。「努力は惨苦に満ち、成果を収めるには冒険が要る。しかも、精神が自己を創造者と感じ、また信じるのは、この場合に限られる」（62）。実際、〈考える〉という一事での「単純な生への回帰」にも「惨苦の努力」は避けられないものであった。そのためには、毒杯を仰ぐということさえ避けられなかった（84）。このような「惨苦の努力」について、〈開いた魂〉は何を言うのだろうか。それはただ「それが何だというのか」（53）と、ひとこと言うのみ（これは恋愛の例でベルクソン自身が用いている言葉。「おそらくは悲劇が待ち受けていて、まるまる一生をしくじり浪費し台なしにしてしまうのではないか。そんなことは分かっているし、感じてもある。だが、それが何だというのか」（52））。つまり、「毒杯？それが何だというのか」。
- e. 必ずしも満足できる答えではない。あらためてベルクソンに問いかけてみる。「それでそのあげく戦争は止まるのか」。ベルクソンは「幾人かの人々が後に続き、他の人々が機会が来れば同じようにするだろうと確信するなら、それだけでもすでにたいしたことである」（70）としている。ただそのときの彼の真の答えはむしろ、「そんなことは考えない」（『可能性と事象性』）であろう。もう少し改まった仕方では、「思想の天才があるように、意志の天才というものがある。そして天才は、およそ予測なるものを眼中に置かない」（77）。
- f. こうして、改めて、「意志」が問題となる。上ですでに引いた『二源泉』末尾のベルクソンの言葉。「人類は自分がなしとげた進歩の重さで半ば押し潰されてうめき苦しんでいる。人類は自分の将来が自分次第であることが十分にわかっていない。第一に、人類はこれからも生き続ける意志があるのか否かを考えてみなければならない」（436）。これがベルクソンの最後の言葉であった。私としても、自分に対する、そして皆さんに対する、この問いで本日の講義を閉じたい。「第一に、われわれはこれからも生き続ける意志があるのか否かを考えてみる必要がある」。以上です。ご清聴ありがとうございました。

40

「最終講義」での堀君・小野君・奈良君からの質問と回答

堀君

Q: コントの〈秩序〉と〈進歩〉で平和は無理なのか、どうしても戦争になるのか？

A: そうだと思います。「学校では皆と仲良く（秩序）、先生のお話をよく聞いて勉強してね（進歩）」が、「受験で他の子に負けないで（戦争）」を凌駕することはないでしょう。むしろ、後者に有用である限りでのみ前者は言われているでしょう。

小野君

Q: 心理学でコントの〈分類〉にないものとして（〈開いた分類〉）の例として、「心霊研究」をベルクソンは挙げるが社会学では〈開いた〉ものはあるのか。

A: 『二源泉』がまさにそれにあたっているはずで、それが当時の社会学や文化人類学、宗教学と違っている、まさにその点に、〈開いた社会学〉が認められるはず。『二源泉』は自らの方法について「交差」を語り、具体的には、「原始人」・「子供」・「内観」の観察を挙げている（378）。

奈良君

Q: ベルクソンで「欲求」は〈開いて〉いるか、〈閉じて〉いるか。〈開いた欲求〉はある？

A: ベルクソンで「欲求」は「閉じた社会」の自己保存に従属したものとなっていよう。「欲求」は社会での他者への虚栄心（‘自分も欲しい’）に従ってしか生じないとされている。それは複雑化し巨大化していても、風船に穴が開くように、必ず消失するとされている。「欲求」に‘いつまでも’ということはない。大航海時代の胡椒やシナモンへの熱狂が一瞬にして消えた例や、肉食（‘おいしいと言われている’）や性欲（‘気に入りたい’）についても虚栄心が背後にあって、消えうるとされている。「欲求」はそもそも贅沢の場合に生じることで、ベルクソンは飢えて死なないように食べるという場合の食欲は「必要」からのものとしている。

41